

宝鏡三昧

如是の法

仏祖密に附す

汝今これを得たり

宣しく能く保護すべし

銀盃に雪を盛り

明月に鷺を蔵す

類して齊からず

混ずるときんば処を知る

意言に在ざれば来機亦おもむく

動ずれば窠臼うをなし

差ば顧佇に落つ

背触ともに非なり

大火聚の如し

但文彩に形せば

即ち染汚に属す

夜半正明

天暁不露

物のために則となる

物のために則となる

用いて諸苦をぬく

有為にあらずといえども

是語なきにあらず

宝鏡にのぞんで

形影相い観るがごとし

汝これ渠にあらず

かれ正に是なんじ

世の嬰兒の五相完具すつが如し

不去不来

不起不住

婆婆和和

有句無句

ついに物を得ず

語いまだ正しからざるがゆえに

重離六爻

篇正回互

畳んで三となり

変じ尽きて五となる

莖艸の味のごとく

金剛の杵のごとし

正中妙挾

敲唱雙びあぐ

宗に通じ途に通ず

挾帯挾路

錯然なるときんば吉なり

犯忤すべからず

天真にして妙なり

迷悟に属せず

因縁時節

寂然として照著す

細には無間に入り

大には方所を絶す

毫忽の差

律呂に応ぜず

今頓漸あり

宗趣を立するによつて

宗趣わかる

即ち是れ規矩なり

宗通じ趣極るも

真常流注

外寂に内揺くは

繋げる駒

伏せる鼠

先聖これを悲しんで

法の檀度となる

其の顛倒に随つて

緇をもつて素となす

顛倒想滅すれば

宵心みずから許す

古轍に合わんと要せば

請う前古を觀ぜよ

仏道を成ずるになんなんとして

十劫樹を觀ず

虎の欠たるがごとく

馬の鼻の如し

下劣あるをもって

宝几珍御

驚異あるをもって

狸奴白牯

羿は巧力をもって

射て百歩に中つ

箭鋒あい値う

巧力なんぞ貯らん

木人まさに歌い

石女たつて舞う

情識の至にあらず

むしろ思慮を容んや

臣は君に奉し

子は父に順ず

順ぜざれば孝にあらず

奉せざれば輔にあらず

潜行密用は

愚のごとく魯のごとし

只能く相続するを

主中の主と名く